

鳥取の街に ウイーンフィルの響きを

とっとり楽友協会

誕生は、 梨花ホールとともに



鳥取市を中心に著名な演奏家を招き、愛好家のみならずたくさんの聴衆を魅了する演奏会を主催している、とっとり楽友協会が発足して今年で十年になる。代表を務めるのは谷口十三生さん(六十六歳)である。発足当時、谷口さんは現役の公務員、それも文化・



梯さんなどが訪れ練習した自宅のピアノを前にする谷口さん。そのピアノには自筆のサインが…

芸術とは無縁の技術系の職員であった。その谷口さんが長年勤めてきた職場を離れ、現在の活動に身を投じるきっかけとなったのは、鳥取市にそれまで無かった大規模なホールを擁する県民文化会館の完成であった。従来、クラシック素通りの地と言われた鳥取に、待望の文化拠点が生じ、環境が整ったわけである。この梨花ホール誕生により谷口

五年を残しての早期退職である。それまでも合唱連盟の理事長を務めるなどの活動を続けていた谷口さんであるが、このときから人生のほとんどのエネルギーを音楽に注ぐこととなる。

終わらないスタンディングオーベーション



とっとり楽友協会は谷口さんを代表に十名のボランティアアスタツフと約一〇〇名の会員で構成されている。これまでの十年間に手がけた演奏会は六十回を数える。特に意を注いだきたのはきらりと光る若い才能の発掘である。演奏会の開催に向け、何年もかけて地道に招致活動を行うのである。この原石発掘に威力を発揮するのが最高の感度を誇る谷口さんご自慢のアンテナと情報網である。長い時間とエネルギーを費やした投資の賜ものなのである。一例を挙げれば、ピアニストの梯剛之さんにギタリストの木村大さんや村治佳織さんなど、今をときめく若手音楽家を彼らが十代の頃にその才能を

見抜き、鳥取に招いてきたのである。さらに梨花ホールに所蔵されているスタインウェイと双壁をなすペーゼンドルフアーという貴重なピアノを梯さんに弾きこなしってもらう企画を試みた。ハードとソフトを知り尽くした経験のなせる技である。このことにより演奏家も新たな世界に身を置き、さらなる能力を開花させることとなるのである。一方、こういった珠玉の演奏に触れたとき鳥取の聴衆は、世界の名だたる舞台の主役を務めてきた演奏家たちにとって、かなり洗練された人々と評価されている。真摯に音楽に耳を傾け、魂を解き放った聴衆たちのスタンディングオーベーション、その鳴りやまない賞賛の拍手は谷口さんにとって無上の報酬ともなるのである。

豊かに育つ若い感性



谷口さんの若手育成の情熱の対象は演奏家ばかりではない、著名な演奏家が鳥取を訪れた際、必ずと言っ

ていいほど市内の小学校で彼らの演奏に親しむ機会を設ける。偏見や先入観のない感性の豊かな時期にすばらしい音楽に触れることは、子どもたちにとって、感動のしわを増やすかけがえのないチャンスとなるのである。かつてバイオリニストの川畠成道さんの演奏を聞いた小学生の「私もこんな音を出してみたい!」のことが素直で純粋なこの世代の感性の豊かさを如実に物語っている。この感性こそを大切に育てていきたいと谷口さんは強調する。そして、「いつかは鳥取にウイーンフィルを呼びたい、全国から愛好家がたくさん集まります!」。隣にいた奥様は、また始まったとばかりに、すかさず「宝くじにでも当たればね」と笑いながら合の手、谷口さんが活動を続けられたのもこの奥様の理解あってのことだろう。おふたりの新婚旅行はロンドン交響楽団の鑑賞旅行だったとか。